

『金光明経』における仏菩薩について：信相菩薩に関する一考察

著者	日野 慧運
著者(英)	Hino Eun
雑誌名	印度學佛教學研究
巻	64
号	2
ページ	869-864
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000653/

『金光明經』における仏菩薩について

——信相菩薩に関する一考察——

日 野 慧 運

問題の所在

ヨハネス・ノーベルの序説において、經中のルチラケートウ (Ruciraketu；曇訳、信相；義訳、妙幢。以下、信相) という登場人物について、經典形成史の観点から論じて、この人物が、經の原型 (Ur-text) から現存テキストの最古層を示す曇訳に至るいずれかの段階で、後から挿入されたと結論している。この指摘を踏まえて、信相の經典中の位置付けを再検討するのが本稿の目的である。

Skt. において信相は第 2 章 (寿量品) で王舎城中の家住の菩薩として登場し、続く第 3 章 (懺悔品) では釈尊の元に赴く。第 9 章では敬礼対象として名のみ挙がる。第 12 章 (正論品) では祖父王ヴァレーンドラケートウ (Varendraketu；智力尊幢)、父王バレーンドラケートウ Balendraketu (力尊相；力尊幢)、新王信相という王統が示され、第 15 章 (授記品) では、信相とその二子ループヤケートウ (Rūpyaketu；銀相；銀幢)・ループヤプラバ (Rūpyaprabha；銀光) が、順次スヴァルナラトナーカラチャトラクータ (Suvarṇaratnākaracchatrakūṭa；金宝蓋山王) 仏などへと成仏する旨、釈尊より記別を授かる。第 19 章 (讚仏品) では諸菩薩に金宝蓋山王仏が讚嘆され、信相が世尊を讚嘆する。

以上の信相の描写を性格についてまとめると、① 釈尊在世時に王舎城に住する在家菩薩であり、② 智力尊幢—力尊相—信相という王統に属す新王であり、③ 銀相・銀光の父であり、④ 未来時に金宝蓋山王仏に成ると授記される、という四種に集約することができる。

さて、*Skt.* と *Tib. I* を除く他伝本には、信相の前生が記される。曇訳では讚嘆品第四で、説主である金龍尊 (*Skt.* Suvarṇabhujendra) 王は信相の、その二子金龍 (Kanakabhujendra)・金光 (Kanakaprabha) は「銀相等」の前生であるとして結合される。従って信相には⑤ 前生において金龍尊であった、という性格が加わる¹⁾。

また、義訳でのみ長者流水品第二十五 (*Skt.* 第 17 章) の前生譚で、釈尊の前生で

ある主人公流水 (Jalavāhana) の父持水 (Jaṭimdhara) を妙幢 (信相) に、二子水満・水蔵 (Jalāmbara・Jalagarbha) を銀幢・銀光に結合する。義訳以外の伝本がそれぞれシュッドーナ、ラーフラ・アーナンダに結合する箇所である。従って義訳でのみ信相には⑥前生においては持水であった、という属性が付されている。

ルチラケートゥへの授記をめぐって

ノーベルの論述の順序に従ってまず⑤について検討する。この記述は先に見た通り、*Skt.*, *Tib. I*には欠けるが曇訳および *Tib. II*, 義訳等の広本が伝えるものである²⁾。曇訳がもっとも原型に近く、*Skt.*, *Tib. I*が増広発展を経たより新しいテキストを示すことは周知されているが³⁾、⑤の記述は逆に曇訳に表れて *Skt.*, *Tib. I*に欠けている。ノーベルはこれについて、*Skt.*, *Tib. I*の短い形は原型に近いことを示すのでなく、省略ないし欠落によるものと解釈した⁴⁾。これと同様の例はのちに *Skt.* 第15章においても指摘されている⁵⁾。また⑤を有する曇訳の讚嘆品は、前章懺悔品で金鼓の懺悔偈を感得した信相の、過去因縁譚として位置付けられる。*Skt.*, *Tib. I*で⑤を想定しないならば、単に金鼓の懺悔偈が過去時にも知られていたことを語る体裁になって不自然であるし、また金龍尊の二子を挙げるのも、信相と二子との結合を予想させる。このように内容の点からも、ノーベルの指摘通り、⑤を伝える曇訳が元来の形と見るべきである。

第4章中で金龍尊は未来生での受記を希求し、誓願を建てる。この誓願が第15章での信相と二子への授記に繋がる。従って属性⑤は④と不可分な関係を持つと見られるべきである。両章で語られる③も同様である。

しかしこの性格付けは第19章で矛盾を来す。同章は(A)諸菩薩による金宝蓋山王仏讚嘆、(B)信相による世尊讚嘆の順に叙述されるが、④の通り金宝蓋山王仏は信相の未来時に成仏した姿であり、同時に語られるはずがないのである。この箇所について、*Skt.*, *Tib. I*, *Tib. II*の記述は大同であり、(A)(B)の時間的・空間的關係を明言しない。一方曇訳では、(A)に讚嘆の主体である菩薩衆が釈尊の説処のある世界から金宝蓋山王仏国土に赴く旨(爾時無量百千万億諸菩薩衆、從此世界至金宝蓋山王如来国土)が、(B)には対比的に「その時この[釈尊の]会座において」(爾時信相菩薩、即於此会)の句が述べられている。さらに義訳にあっては、(A)の讚嘆の対象が金宝蓋山王仏から釈迦牟尼に交替しており、讚嘆の舞台も鷲峰山に設定されて、そのまま(B)へとスムーズに進展している⁶⁾。

先の議論と同様に曇訳を優先するなら、原型に近い読みは、菩薩衆による金宝

(176) 『金光明経』における仏菩薩について (日野)

蓋山王仏讃嘆と、信相による釈尊讃嘆は、同時・別処の事件であることが明記されたものとすべきであろう。Skt., 二蔵訳の読みはこれを省略したものということになる。しかしその上で、やはり未来仏たる金宝蓋山王仏が、現在時に讃嘆される矛盾は解消されない。義訳への註釈である慧沼『金光明最勝王経疏』(T. no. 1788, vol. 39)はこの点を取り上げて、「新訳(義訳)が正しく、旧経(曇訳)は誤りである。何とならば[経の説主は釈尊であるから]金宝蓋山王如来が讃嘆される謂れがない、また信相が成仏した如来だから讃嘆されるのだというなら、信相は[未来時に成仏するのだから]現在時の如来たりえない」(取意, 337a)と解説している。

慧沼の指摘の通り、曇訳が現在時と未来時の二人の金宝蓋山王仏を語っていると考えるのは難しい。この曇訳の読みを錯誤として斥けないならば、(A)の「爾時」を未来時ととり、金宝蓋山王仏讃嘆の一節を釈尊の予言とみなし、(B)の「爾時」を釈尊の説示の終わった時と解釈するほかない。このように見れば、(A)は授記の一部をなす言説で、むしろ第15章の信相授記の直後(Skt. 168.10, 曇訳 351a10)に記されれば適当だったであろうものと見ることができ、(B)は受記に応じた信相による釈尊讃嘆と捉えることができるのである。

従って、信相の性格③④⑤が不可分の関係をもつと言えるのであり、これを叙述する第4, 15章の信相と二子への授記、第19章の金宝蓋山王仏讃嘆と信相の釈尊讃嘆は、それらが隔絶して配置されてはいるものの、一連の説話と捉えられるべきものと見なせよう。

家住の菩薩か新王か

さて、第4, 15, 19章の間隙にあつて信相に言及するのが第12章であり、ここでのみ属性②が叙述される。先行研究は②と上述の③を組み合わせる形で信相の家系図を示してきた⁷⁾。

第12章の冒頭部分には、新王、父王、祖父王の名が挙がる⁸⁾。ただし祖父王の名は曇訳にのみ欠け、曇訳からSkt., Tib. Iに至るまでに増広付加されたものと見られる。導入部分に注意すると、Skt., Tib. Iは対応しており、tena khalu punah kālena tena samayena (yang de'i thse de'i dus na)の接続句で叙述が開始される。『金光明経』中ではこの句はまったく新しい時・場所における説話の導入に用いられる場合と⁹⁾、直前の文章に引き続く時間を指示する場合とがある¹⁰⁾、以下の叙述の時間的・空間的位置付けは明瞭ではない。一方、曇訳, Tib. II, 義訳では、釈尊が地神堅牢(sa'i lha mo brtan ma)に語る過去の(sngon byung ba 'das pa'i dus)説話で

あると前置きされ、その中に信相の王統が語られている。

ここで前節と同様、曇訳を優先し、*Skt.*, *Tib. I*ではこの導入の一節が欠落ないし省略されたと見るならば、*Skt.*, *Tib. I*においては明示されないながら、新王信相の説話は過去話として語られていると考えることができる。

さらに第12章の新王信相は現在時の属性①をもつ信相、すなわち王舎城中の菩薩摩訶薩であり(*Skt.* 6.1-2)、家住であり(*Skt.* 7.4, 6)、都城を出てすぐに靈鷲山の釈尊に見えることができる(*Skt.* 21.2-5)人物と同一とは見なし難い。信相は登場するほぼすべての箇所です菩薩と称されるが¹¹⁾、例外的に12章では菩薩の呼称がなく、逆に他章には王であるという記述が見えない。また、家住をいう箇所に王宮等の語は出ず¹²⁾、かえって新王信相を述べる12章には王舎城等の地名も住処も挙がらない。このように①菩薩信相と②新王信相はその描写において断絶が見られるのである。

以上から、過去話中の②新王信相と、属性①③④⑤を具え、現在時に釈尊に見える菩薩信相は、別人物であるとするべきであろう。従って新王信相の王統と、記別を授かる信相とその二子は、元来接続しえない別個の家系なのである。

結論とノーベル説の検討

以上の検討をまとめると、次のように結論される。まず*Skt.*, *Tib. I*においては伝承の欠落ないし省略が起りえ、難解な箇所は曇訳の読みを補って読まれる必要がある。これによって理解されるどころでは、第3, 4, 15, 19章で語られる信相が、①, ③, ④, ⑤, という性格を具え、「前生における誓願—今生における金鼓の懺悔偈の感得・誦出—授記」という連続した説話の中にあることが分かる。一方で第12章に語られる②(智力尊幢—力尊相—信相という王統に属す新王)の性格を具えた信相は、上の信相とは別種の説話に属する人物と見られるべきである。すなわち、二種の信相が語られているのである。

さて、義訳には属性⑥が述べられるが、これは明らかに後代の付加である。経は義訳に至るまでに多くの大乘菩薩を取り入れた。対告衆だけを見ても虚空蔵菩薩、師子相無礙光焰菩薩、善住菩薩、観自在菩薩などが新しく現れ、讃嘆や陀羅尼にはさらに多くの名が挙がる。経は増広発展とともに大乘菩薩の称揚の度合いを増す傾向にある。長者流水品に⑥が付加されたのもその一端と言えよう。ノーベルはこの傾向を認めるがゆえに、かえって大乘菩薩称揚を極力排した形にこそ、経の原型を見出そうと試みた。そして第2章で如来の寿量を問い、第3章で本経

(178) 『金光明経』における仏菩薩について (日野)

の経題に結びつく金鼓の懺悔偈を誦出して、経の中核的な教説の説主もしくは対告衆の役割を担う信相についても、ノーベルは後代付加の要素と見なす。より原型に近い体裁においては、第3章の説主は第4章と同じ金龍尊であったとし、第2, 3章とも信相が言及される部分はすべて元来存在しない部分である¹³⁾。

確かに本稿で確認した二種の信相の説話が、前後、間隙の章からは独立性の高い内容であることは認めうる。それゆえ、信相の説話と他経説には成立段階に相違があることが考えられる。しかしその先後関係は曇訳以降のテキストにおいては判断しがたい¹⁴⁾。

しかし、大乘菩薩信相が完全に排されたテキストの原型を考えると、一つのモデルが想起される。『高僧伝』(T. no. 2059, vol. 50)が記す、永平年間(58-75)の後漢に仏法を伝えた攝摩騰が講じたという「金光明経」である。この短部の記事は「経云、能説此経法、為地神所護、使所居安楽」(322c17-19)と伝えており、如来の寿量や菩薩の授記といった要素が全く抜けている。しかし本稿でも確認した通り、本経では伝承過程において説主の交替が起こりうる。曇訳よりさらに古い原型を構想するとき、攝摩騰説に記される金光明経の体裁は、一つの検討材料となりうるだろう。

-
- 1) ノーベルは曇訳の訳語を「金龍尊 *Suvarṇabhujāṅendra」「金龍 *Kanakabhujāṅga」と還梵するが、本稿では梵本の対応語を採用し、もって諸本における同人物をも指す。
- 2) 合部, *Tib. III* 対応部はそれぞれ曇訳, 義訳と一致するので本稿では以降も取り上げない。なお、義訳該当箇所は五言三頌で直前までの七言から変調しており、しかも「銀相銀光」(曇訳「銀相等」)と名を挙げるが義訳の *Rūpyaketu* の訳語は「銀幢」である。そこで義訳の該当箇所は、曇訳授記品、もしくは曇訳対応部とそれに対する疏註(吉蔵『金光明経疏』T. no. 1787, vol. 39, 165a など)を併せて参照した、翻訳段階での付加が疑われるが、しかし義訳の三頌は梵文原典が想定される *Tib. II* の末尾三偈と内容上一致するので、義訳もまた梵文の典拠があると見るべきだろう。
- 3) *Skt.* xxx-xxxii, xlvi-xlvi; *Skjærvø* [2004: lv-lvi]. 4) *Skt.* xxxvii. 5) 土田 [1984]. 6) (A) *Skt.* 241, 2-6; *Tib. I, II* 175, 2-9; 曇訳, 356c; 義訳, 454b-c, (B) *Skt.* 243, 7-10; *Tib. I, II* 178, 2-5; 曇訳, 357a; 義訳, 454c-455a. 7) *Skt.* xxxviii, 金岡 [1980: 109]. 8) *Skt.* 132, 4-8; *Tib. I* 103. 15-20; 曇訳, 346c24-26; *Tib. II* 308. 14-19, 103. 19-20; 義訳, 442a23-28. 9) 第2章冒頭, *Skt.* 6, *Tib. I* 8, etc. 10) 第16章中, *Skt.* 174, *Tib. I* 137, etc. 11) *Skt.* 第2章 6.7, 9.6, 10.6, 19.5, 第3章 20.2, 21.1, 21.6, 第9章 120.3, 第19章 243.7. 第15章では *satpuruṣa* と称されるのみだが、彼への授記が *bodhisattva-vyākaraṇa* と称される。12) *Skt.*, *Tib. I, II* 8.22, 9.2 とも「家」(*grha*, *khyim*)。漢訳はいずれも「室」の語を用い(曇訳, 335c26, 29; 義訳, 404c10) 家と内室の両義にとれるが、*Tib. III*

『金光明経』における仏菩薩について（日 野）

(179)

は義訳の「室」を“khang kyim”（房屋）と解す。 13) *Skt.* xxxvi–xl. 14) 思想的発展についての大乗菩薩称揚以外の視点については鈴木 [1999], Suzuki [2012] [2013] 参照。また信相説話の外部源泉との比較で先後関係を論じることにも困難で、管見の限り他典籍に Ruciraketu の名は見出し難い。金岡 [1980: 108] は『華嚴経』入法界品三四の一を例示するが原語は“Ruciradhvaja” (*Gaṇḍavyūhasūtra*, ed. P. L. Vaidya [Darbhanga: Mithila Institute, 1960], p. 2).

〈略号〉

Skt. Nobel, Johannes, ed. *Suvarṇabhāsottamasūtra, Das Goldglanz-sūtra, Ein Sanskrittext des Mahāyāna-buddhismus: Nach den Handschriften und mit Hilfe der tibetischen und chinesischen Übertragungen*. Leipzig: Otto Harrassowitz, 1937. *Tib. I = Nobel 1944.* Nobel, Johannes, ed. *Suvarṇabhāsottamasūtra, Das Goldglanz-sūtra, Ein Sanskrittext des Mahāyāna-buddhismus: Die Tibetischen Übertragungen mit einem Wörterbuch*. Leiden: E. J. Brill. (*'Phags pa gser 'od dam pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po shes bya ba theg pa chen po'i mdo*, P. no. 176, D. no. 557, N. no. 762). *Tib. II = Nobel 1944.* (*'Phags pa gser 'od dam pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po shes bya ba theg pa chen po'i mdo*, Jinamitra, Śtīndrabodhi, Ye shes sde, P. no. 175, D. no. 556, N. no. 490). *Tib. III 'Phag pa gser 'od dam pa mchog tu rnam par rgyal ba'i mdo sde'i rgyal po theg pa chen po'i mdo*, 法成 (Chos grub), P. no. 174, D. no. 555, N. no. 489. 曇無讖訳『金光明経』曇無讖訳, T. no. 663, vol. 16. 合部『合部金光明経』宝貴合揉, T. no. 664, vol. 16. 義訳『金光明最勝王経』義浄訳, T. no. 665, vol. 16.

〈参考文献〉

- Skjærvø, Prods Oktor. 2004. *This Most Excellent Shine of Gold, King of Kings of Sutras, the Khotanese Suvarṇabhāsottamasūtra*. Vol. I. Central Asian Sources V, Sources of Oriental Languages and Literatures 60. Cambridge: Harvard University.
- 金岡秀友 1980『金光明経の研究』大東出版社。
- 鈴木隆泰 1999「金光明経如来寿量品の発展過程より見た如来の寿量と遺骨」『東洋文化研究所紀要』138: 195–219.
- Suzuki Takayasu. 2012. “Who is the One That Has to Make Confession under the Instruction of the *Suvarṇaprabhāsa*?” 『印仏研』60 (3): 1220–1228.
- . 2013. “What the Preachers of the *Suvarṇaprabhāsa* Resolved in the *Kamalākara-parivarta*.” 『印仏研』61 (3): 1143–1150.
- 土田龍太郎 1984「梵文金光明経授記品の構成」『宗教研究』58 (1): 49–64.

〈キーワード〉 『金光明経』, 信相, 妙懂

(武蔵野大学助教)